

明日に活かせるグローバル情報誌

World JC

JointClub



TAKE FREE

アプリ版も無料配信中

アジアネットワーク最新事情

スマートフォンが 起こすネット革命

紳士の休息

ブラザートム

米デルやMITが認めたマレーシアのIT国家戦略
戦国最強の軍師・黒田官兵衛に学ぶ知と心
老舗酒造が挑戦した巨峰ワインは半世紀の味

地域通貨が後押しするリユースの輪 消費者の「面倒」をクリアする実益

日本は資源のない国と言われる。都市鉱山として使用済みの携帯電話や家電が注目されているように、国内の限りある資源は回収、再利用していかねばならない。日々の生活から出るゴミの中でも、新聞紙をはじめとした紙類、ペットボトル、缶、瓶などは立派な資源。これらの分別回収は行われているが、分別を面倒だと感じている人は少なくないだろう。捨てる側にとってはひと手間増

えるだけで、メリットが感じられない。

この消費者の気持ちを汲み取り、新聞紙

収集に地域通貨を導入した

団体がある。それが福岡県

内で活動するNPO法人新

聞環境システム研究所だ。

同団体は、福岡市（東区

と西区）、飯塚市、久留米

市など、複数の地域で新聞

紙の集荷を行っている。開

設場所はスーパーや図書館

などで、ここで収集された

新聞紙は、地域通貨「ペバ」と交換され

る。1kg11ペバ換算で、30ペバ貯まると

80円の割引券として「nimoca」のチ

ヤージなどに利用できる。使われたペバは

同団体が買い戻すことにより、割引額を負

担している。

30kgの新聞紙は一般家庭の約3ヵ月分に

あたる。割引券を手にするまでには時間が

かかるうえ、得られるのは小額なもの、

県全体では約1600世帯が活用してい

る。実際に西区で集荷を利用する主婦に話

を聞くと「集荷場がスーパーの駐車場内に

あるため、買い物ついでに利用できて便

利。なにももらえない市の集荷場よりも、

ペバと交換してもらえるところのほうが持

つて行きたくなる」そうだ。地域通貨とい

う利益を付加したことで手間を実益に変

え、利用者の積極的

参加を促進した。

同団体が活動を

通して目指すのは

「資源の長生き」。

理事の加来睦博さ

んは「読み終わった

新聞紙を焼却処分

すれば費用がかか

るし、工場でリサ

イクルすれば運搬・製造エネルギーに加え

大量の水も必要です。コストをかけず簡単

に新聞紙を資源として長生きさせるには、

人々の生活圏内で再利用することが理想だ

と考えます」と話す。

再利用の例として、収集した新聞紙から

鉛筆やバッグを製作。ほかの資源やエネル

ギーを使って処分、またはリサイクルされ

るはずだったものを新たに商品として販売

することにより、新聞紙の「リユース」を

図っている。この売上は地域通貨買い戻し



宣伝をせずとも、利用者は口コミで増えているという

NPO法人 新聞環境システム研究所

2001年11月設立。「紙をもっと役立てたい、紙のことをもっと知ってもらいたい」と、地域通貨を導入した新聞紙のリサイクル事業を行う。紙の大切さを伝える新聞長生き教室や、新聞紙で作る鉛筆やバッグの出張講座もある。また、ほかのNPO団体とともに、地域の「環境に優しい暮らし」を実現するためベッタ会を運営。月3回行うベッタ学習会（福岡市東区三苫の循環生活研究所にてTEL 092-405-5217）のうち、第4木曜日には前述の鉛筆やバッグの製作が体験できる。参加費は300円（お茶代込み）、要予約。

福岡市東区名島3-6-2-202
info@pepa.jp
http://www.pepa.jp